

## 「日本画入門研修」

2019年2月14日（木）実施 第一支部研修終了レポート

2月14日（木）13:00-15:30、第一支部「日本画入門研修」が賛助会員である加島美術様の画廊で実施され、全国各地からの参加者も含め会員46名、非会員6名、委員2名計54名が参加しました。（講師は加島美術様のスタッフの蝦名 清一（きよかず）様）

前半の講義（13:00～13:50）は「日本画の基礎知識」ということで、日本画とは明治以降に西洋画と区別するためにできた新しい言葉であるという日本画の定義、日本画の特徴（絹、和紙、膠、岩絵具、金属材料等の画材、あえて描かないことで見ている人に想像させ空間そのものに意味を持たせる余白の美、自然を楽しむ愛でる）、日本画の画題（花鳥、山水、動物、人物、吉祥画、富士山、季節のもの等）、日本画の様々な形式（掛け軸、屏風絵、襖絵、扇面、またそれぞれを構成している名称など）についてご講義くださいました。中国では屏風はもともと仕切りや風よけだったものから日本に伝わって空間を演出するものとなっていったこと、六曲一双12面は右から春夏秋冬の12か月を表したものが多いこと、掛け軸に比べて大きくて持ち運びも難しいだけに意外に買い求めやすいこと、表具の一部の風帯は元々は鳥よけの名残であること、本紙以外の表具の上下の幅は本紙の部分が最も美しく見えるように黄金比で決まっていること、メンテナンスしやすいようあえてバラバラにできるようにしていること、なるべく本紙に合わせた時代の表装にすること等次から次へと興味深いお話の連続でした。

休憩をはさんで後半の講義（14:00～15:00）は「日本美術の様々なカテゴリー」として水墨画、禅画、狩野派、琳派、円山四条派、若冲や蕭白などの異色の画家、墨跡など短い時間の中わかりやすい解説で若冲や白隠等の実際の作品をすぐ近くで拝見しながらポイントをだまかに語ってくださいました。特に水墨画のカテゴリーでは「墨に五彩あり」と言われるように無限の表現で無限の世界観を作る水墨画の奥深さを改めて感じましたし、さらりと触れていた

「胸中山水」という言葉や白隠の面白いエピソード等とても新鮮で興味深いものでした。後半も内容の濃い、盛りだくさんのテーマで時間が足りなくなるほどでした。また、質疑応答にも先生は一つ一つ丁寧に答えてくださいました。参加者からは「すごくためになった」「知らないことがたくさんありこれからも学んでいきたい」「外国人には人気の作家でも自分は知らない書家や画家が多かった」などの感想を多く頂きました。最後の蝦名講師の「でもやっぱり理屈よりも心から作品を味わい楽しむこと、これに尽きます」という温かいお言葉に皆勇気づけられました。

